

和紙

だより

越前和紙への提言



■桜井 貞子(さくらい さだこ)

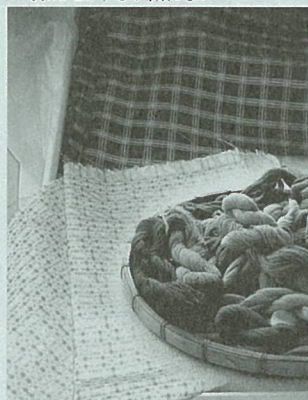
昭和4年東京生まれ。40才の頃より佐賀錦を織り始める。48才の時、宮城県白石市にて、門外不出の技術により受け継がれてきた「白石紙布」に出会う。地元に限られた家にしか製法を伝えることが許されない、教えてくれる者がないこの白石紙布に挑み、その製法を試行錯誤の上、独力で解明。爾来貴重な昔の紙布の復元に携わる他、伝統工芸展、個展に帯、着物地、シャツ地などを出品し、高い評価を得ている。作品は、シアトル、サンディエゴ、サンフランシスコ、ポートランド等、海外ミュージアムにも展示され、美しい脅威の和紙織物は、多くの人を魅了。紙アカデミー賞受賞。工芸展入選多数。水戸市在住。

■桜井貞子さん(紙布作家・研究)

「紙漉きさんと夫に支えられ、四十年」



藍と茜で染めた二重織りの風通絹は一日50センチしか織れない



亀甲紋のような丸が規則正しく並ぶ「網目織り」作品

色とりどりの植物染料染めの紙糸

●格の違う薄い白石の紙布

二年前に亡くなった夫はコンピュータ関係の仕事をしていましたが、ある時、織物に興味のあった私を、白石市にすばらしい紙布があるからと、車で連れて行ってくれたのです。それまで見たこわこわした厚手の紙布とは全く違い、大変細い和紙の糸で織られていて、自生地には透ける布もありました。奥州では木綿が高価だったので、紙子は夜具や衣服によく使われたようですが、白石紙布は、江戸時代には伊達藩より將軍家への夏の衣料用の献上品で、最高級品でした。その製造は、紙を切る家、荒揉みをする家、仕上げ揉みをする家、績む家(糸をつなぐ)、糸に撚りをかける家、織る家など、全て分業で、代々絶対に漏らしてはいけない秘密だったそうです。

帰路の車内で、「白石の技術はこのままでは途絶えてしまうから、お前がやれ！」と夫が言うのです。実は、主人の方が熱心だった。といても門外不出の技術ですから、技術を継いでいらした家の方にも、「お教えできません」と断られ、もう自分達でやるしかないと思いました。白石城の片倉家の十六代当主の信光さんに相談にも行ったのですが、お殿様は分からないとおっしゃる。(笑)文献を貸してあげるからと、貸して下さって、二人でああでもない、こうでもない、と試行錯誤を重ね、やっとそれらしいものができると、一年三ヶ月もかかってしまいました。

●独力で解明した技術

一番苦労したのは、糸を湿らすという技術です。紙はまず四枚に蛇腹に折って、二ミリや三ミリに切っていくのですが、次の工程の裁断した紙を揉む作業は、白石では、湿らした糸を地元の河原で取れるざらざらのじゃつけ石の台を使用していたらしい。霧吹きをかけてみたら、紙はみんな切れてしまうし、湿らして石の上で揉むという工程が分からなかった。何しろ手探り状態で、道具から製法から、何から何まで最初から考えなくてはなりません。紙を切る道具や紙を揉むブロック台も主人が考案してくれました。糸を揉んでいると、手が傷だらけになるものですから、ブロックには石灰を塗るといふ工夫もしてくれました。とにかく湿らして揉むのは白石だけで、どこにもない技術だった。それを探り当てるのに、どれだけ失敗したか分かりません。紙だつて高い。終いには、この家も売ってしまおうかというくらい貧乏しちやつて。(笑)

やつとできたものを片倉さんに見てもらおうと、仙台に行った時、たまたま郷土博物館で紙布が展示してあり、昭和の初めに白石紙布を復元した折のビデオというのが上映されていました。見たら、私がやったことと全く同じやり方で、紙を湿らせて揉んでいるじゃありませんか！その場でへたと床に座り込んでしまいました。ああ、私のやり方でよかつたんだーつて。

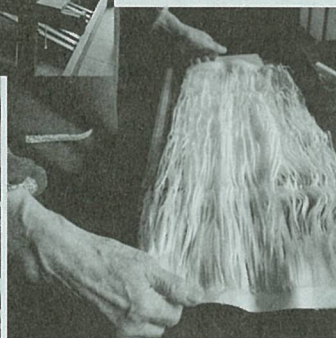
●漉いた人の性格が出る和紙

紙布作りの行程の八割は糸作りに割られます。縦糸には、普通、絹糸、木綿糸、麻糸などを使い、絹紙布(きぬじふ)は公の席でも着る物、綿糸布(めんじふ)や麻紙布(あさじふ)は日常着や労働着に使われてきました。縦糸にも横糸にも紙糸を使うのは諸紙布(もろじふ)と呼ば

風通絹を織る織機



ご主人考案の道具で紙を切る



■京都版画館 版元まつ九&工芸はなせ
京都職人のネットワークを活かした和紙プロデュース

れ、よほど紙がよくないとできません。白石では紙布用紙というのがありましたが、私のいる茨城にはありません。茨城の那須楮というのが一番だと聞いたので、西の内和紙の菊地さんの所に幾度となく足を運びました。あんまりうるさく注文をつけるものですか、「漉けもしねえくせに、うるせえ！」と怒鳴られたこともありましたよ。(笑)私も自分で漉いてみたけど、やっぱり餅は餅屋。漉けませんから、平身低頭でお願いするしかない。(笑)今は、菊地正気さんの息子の大輔さんが漉いてくれる紙を使っています。彼の紙は、つなぎ目の節も抜けず丈夫で、光沢のある糸ができます。私は二ミリの紙を糸に撚り、諸紙布の風通紙(ふうつうがすり)という裏と表の模様が違う緻密な二重織りの反物を復元しましたが、これも彼の紙がなかったら作れなかったものです。

やっぱり紙も性格が出ますよ。いろんな方がうちの紙を使ってみて下さいと送ってきます。それを使って紙を揉んでいると、この人は多分こういう人だなあとと思うと、びたつと合う。富山のある紙漉さんは、くそまじめで融通の利かない人じゃなかなあと思つたら、会つたらまさにそういう人でした。(笑)大輔さんの紙は、不思議と穏やか。親父さんと違う漉き方しているらしく、寒漉きで彼独特の工夫があるようです。

主人は探求心が旺盛で、私がやめたいと思つてもやめさせてくれなかった。そういう自分も負けず嫌いの所があつて、織つたちりめんなど、気に入らないと平気で四反も五反も捨てたんですよ。私の紙布は、夫と紙漉さんに支えられてここまでやつてこられたのです。ホント、感謝しています。

貴重なコレクションも多い版画館の展示
(見学は要予約)



「版」の字が印象的な京都版画館。版元まつ九人口

<http://www.kyoto-matsukyu.jp/top.html>

昔から和紙に縁の深い版画は、江戸期には歌舞伎絵、浮世絵、風景画などで隆盛を極めるが、元々は宗教の世界から派生して発展してきたという。そういえば神社仏閣には、千社札経文、散華を始め、版画にまつわる品々が多くある。現代のような印刷技術のない時代だから、木版の技術は美術品のみならず、情報伝達的手段としても身近な技術であつただろう。

「版元まつ九」を取り仕切る徳力家は、代々西本願寺絵所の家系。平安時代に仏教と共に歩んだ京版画は、絵師、彫師、摺師を筆頭に紙屋、板屋等を従えて版画を製作する職人衆が制度化され、「版元」と称する現代の出版社の様な組織が生まれた。明治・大正・昭和の初期には、一人の作家が自分で絵を描き、彫つて、刷る、いわゆる「近代版画」が誕生する。当家の十三代目、徳力道隆さんの父、富吉郎さんは、京版画に新風を吹き込んだ近代版画界の第一人者でもあり、「版元まつ九」の創始者だ。併設さ



プロデューサーの徳力道隆さんと絵屋茶寮で

●版元のネットワークを活かして

道隆さんは、若い頃にはクラフト・工芸の分野で、多くの賞を取つた工芸作家でもある。四十年前には、京都の山間部・花春に仲間と共にアトリエを作り商品企画から製作までを行う「工芸はなせ」を設立。これまで、京都の豆腐・味噌・漬物店などのブランド作りや町屋レストラン、土産物のプロデュースを多く手掛けた。企画にまつわる最終製品まで納めることができるのが強みだが、ここに版元のネットワークが活かされる。素材では、土・木・金・ガラス・糸・漆・紙、職種では彫・摺・型染・図案・鵜縷(ろうけつ)・陶引手・木引手・蒔絵・表具などの職人さん達が、作業場である「工芸はなせ」には多く出入りしている。

「賞を取るには、目立つものを作らなくてはなりません。目立つものは、誰も買ってくれない。若い頃、売れないということをやというほど経験していますから、今はリーズナブルな値段で、さりげなくて、しゃれつ気のある、和紙に

まつわるありとあらゆる事に挑戦しています。」と語る道隆さん。実は有名な京都のカバンメーカー・一澤信三郎帆布の鞆デザインや、器の制作、内装デザイン、店舗をプロデュースした人でもある。

●サブライズのある和紙インテリア

現在熱心に取り組んでいるもののひとつが、和紙でガラツとイメージチェンジができるインテリア和紙製品の開発だ。壁に貼つたり、襖や障子紙を変えるだけで大きな工事も入らないので、リフォームに比べると短時間ででき、値段も手頃だ。西陣に残る着物を染める大判の三・六の送り模様型を利用し、障子紙や襖紙に、桐紋、菊紋、薔薇紋、白鳳瓦紋、編紋などを雲母(きら)や色刷りで印刷し、「版画唐紙」と名付けた。京唐紙と言えば「唐長」が有名だが、この唐紙は江戸期に発展した唐長以前の模様を目指している。模様には、一つに歴史的な目く調われがあり、それを掘り起こして復元を考えるのも楽しい作業という。敷地の一角には「絵屋茶寮」という茶室があり、茶席には襖紙や掛け軸と揃い模様の懐紙が使われるなど、さしずめ和紙インテリアの実験室と言つたところ。雲母印刷の障子も、陽の移ろいと共に刻々と表情を変えて輝く。これらの商品は、住宅メーカーの目を引き、来年から住宅展示場のモデルルームにも採用される。

開発した雲母刷りの障子紙「桐紋」



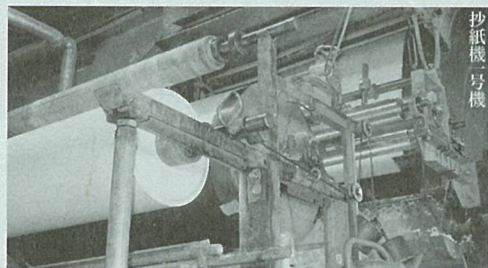
漉き場探訪

■(有)小畑製紙所
「積層ICタグ漉き込み和紙にかける」

小畑製紙所の創業は、現社長の小畑明弘さんの祖父の代に始まる。十五、六才から兄弟で岩野平三郎製紙所で働き、打ち雲などの伝統技術も習った。十年くらい経った大正十二年頃には独立し、手漉きで局紙、証券紙、襖紙などを漉く。戦後は、証券用紙の生産に特化し始め、現在では局紙を主とした機械漉き専門の会社だ。従業員は七人。

●白透かし証券紙全盛を経て

明治初期に大蔵省紙幣寮抄紙局の「局」の字にちなんだ名で、紙幣用紙として開発された局紙は、越前のお家芸の技術である。局紙の技術は偽造防止の「透かし」を始め、印刷特性のよい和紙の生産に寄与し、昭和三〇四十年代ピークを迎える。戦後の復興の波は殊の外大きく、当社の証券用紙製造は当初七、八槽の漉き舟で手漉きで行っていたが、生産が追いつかなくなったため、昭和三十六年に大量生産を目的に抄紙機一号機を導入。二年後の三十八年七月に有限会社小畑製紙所を設立した。この時点で、手漉きの襖紙製造は止め、不足がちな人員を機械漉きに投入し、昭和四十四年



には、証券紙専用の二号機を買い入れた。折しも、日本は高度成長真っただ中、翌年の四十五年には大阪万博も開催され、活発な企業活動と併行して証券用紙の需要は大幅に伸びた。

当時の大手証券印刷会社は、大日本印刷、凸版印刷、共同印刷、亜細亜証券印刷、瀬味証券印刷などで、東京市場にも売り込みに出向くも、地の利が悪いため、なかなか相手にされず、最後にやつと入り込むことができた。大阪市場では、凸版系列となる。凸版系列の証券紙製造会社八社のうち、六社は越前、他は岐阜と静岡の会社だったという。越前では証券印刷会社の系列により数社の製紙所が仕事を分け合っていた。

「黒透かしは使つてはいけない技術になって御上に取り上げられてしまいました。我々は白透かし一本で、社債、公債、株券、小切手、手形、商品券など作り、印刷特性もいいため、需要はありました。」と小畑さんは当時を振り返る。

●ホログラムから積層ICタグへ

平成十年頃になると銀行の合併や社名変更が相次ぎ、そのための株券は作り替え需要で第二波を迎える。「トマト」や「あさひ」や「さくら」の銀行名がこんがらがって覚えられなかった方も多いと思う。どうせ株券を作り替えるのだつたら、偽造防止にもっと付加価値のある「透かし+ホログラム」の紙を作つてはどうかと模索している時、静岡の機械メーカーが売り込みに来た。考えた末に、ホログラム用機械の導入を決心した。といっても、大きな仕事は、安倍川製紙や特種製紙に流れたが、当社は小回りのきく分、依頼点数はそこそこあり、銀行、信用金庫、損保、百貨店などの仕事を丹念に拾った。小畑製紙は全国でホログラム漉き

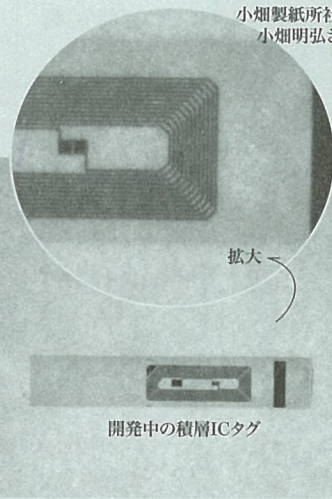
込み紙の製造できる三社のうちの二社となった。

平成十八年頃になると、今まで何度となく延期されてきた株券電子化が本格化する気配で、その対応策を取引先や弁理士の所に相談を持ちかけた所、次はICタグだとの意見で一致した。ICタグとは、ICチップと小型のアンテナを埋め込み、そこに記憶された情報を電波によつて、直接触れずに読み取る技術で、現在のバーコードに取



小畑製紙所社長
小畑明弘さん

て代わる技術だと位置づけられている。前段階の技術では特許も取つたが、現在、当社が開発して



開発中の積層ICタグ

いるのは、ポリエチレンテレフタレート(PET)の上に「積層ICタグ」を埋め込んだテープを漉き込んだ紙だ。通常のICタグは重なるように読み取れなくなるが、積層ICタグはページ数が多くとも、瞬時に読み取り、一ページ単位で管理できる。重要文書や機密書類の管理に利用でき、将来性も高い。今の技術で普通五十枚読み取れるが、目標は三五〇枚を設定している。A四の大型ファイルは三五〇枚ファイルできるので何とかこれをクリアしたいとのこと。今年三月の東京新宿のオゾンでの

●メッセージ代わりの「おはこ」

もうひとつのユニーク商品が「おはこ」と呼ばれる、時に触れて挨拶代わりに贈る小さな貼り箱のシリーズだ。七・五センチ角の小さな版面の貼り箱の提案は、安価なトムソン箱を押しつけ、京都の贈答用紙箱の新時代を切り開いた。「おはこ」の中には厳選されたそば茶や黒糖金平糖等が入っており、一箱五〇〇円程度でちよつとしたお遣いものに最適。春夏秋冬のメッセージ、挨拶、お礼、仏事、お祝いに使え、「あつちおます」「かんしゃ」「お体どうぞ大切に」「寒中お伺」「こころばかり」などと印刷された箱は、版面の絵柄部分と箱自体を別々に作り、用途に応じて変えることができるようにしたことで、小ロット多品種、特注品需要に対応できる。現在までに千五百種の図柄が作られ、その中には伝統芸能や芸能人の特注品も少なくない。



ヒットシリーズの「おはこ」

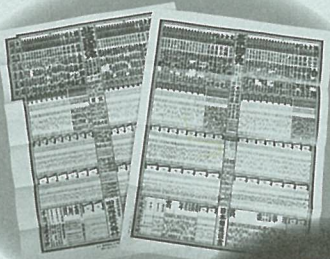
「京都のものづくりは、原材料に付加価値を付けて加工するのが基本です。文化的な情報やうんちく話を付加するだけでも、他所で売っているものより高く売れるのはありがたいことですが、だからこそ、これで本モノやろか？歴史を持ち、庶民に親しまれ、残るもんやろか？といつも自問しています。」と京都人の自負心ものぞかせる。

展示会では、試作数枚を出品したが、専門家の反応も上々。「伝統工芸とIT技術の融合で新規需要開拓を狙いたい」と意欲を語る。

●その他の製品

その他にも当社は、大相撲の番付用紙を二十五年ほど納めている。番付の文字は小さい文字が鮮明に出なくてはならず、インクのみこみ具合が気に入らなくてはならず、最近では同じ紙を使って「プロ野球会番付社」という所が年一回野球番付を発行している。「いろいろなジャンルで番付を作ってくれたらいいのになあ」とニコリする小畑さん。

透かし技術を使った卒業証書は定番で最近は地域振興券なども手掛けている。工場では、東京大学、早稲田大学の卒業証書が検品されていた。透かしとプログラム漉き込みの技を使った結婚式カードセットも三年前、開発した。この様なエンドユーザー向け開発商品は、余り動きは良くないというが、このジャンルも気長に取り組みつもりだという。



大相撲の番付用紙を収めて25年

オリジナル結婚式カードセット

URL: <http://www.obata-seishijo.co.jp>

■「淀川のウドノヨシ展」
環境団体とパートナーシップでヨシ紙紹介



大阪の南北を流れる淀川の貴重な「鶺鴒ヨシ原」の保全を行っている環境団体と、刈り取ったヨシ紙を製造している山田兄弟製紙(越前市)は、大阪枚方市のギャラリーで展示会を行っている。会場の「アトリエMay」では、鶺鴒ヨシ原研究所、鶺鴒クラブの日頃の活動や生態調査の研究成果などをパネルで紹介している他、ヨシ紙で新市場を開拓し、環境にも貢献したいと考える同社のヨシ紙製便箋・封筒や建具などが展示され、関西圏の

企業のCSR担当者なども訪れている。会期は三回に分かれ、前半は五月二十七日～六月二十五日、後半は七月六日～八月六日と、比較的長期間にわたって展示される。後半展示はヨシ紙を中心とした企画で、東儀秀樹氏のイラスト入り便箋・封筒をはじめ、通常手に入りにくい大きな紙の展示販売、和紙パネルの手作り体験、大正琴のコンサートなどが行われる。同社の山田京代さんは「じっくりヨシ紙の可能性を見てもらい、今後、企業の封筒・便箋、環境報告書などの市場を探りたい」と意欲を語った。

情報欄

●イベント情報

■越前市小学生卒業証書漉き

時:2010年 7月20日(火)～8月26日(木)

場所:パピルス館(越前市新在家町)

越前市全17校 843名の児童が自分で卒業証書漉きを体験します。

●イベント報告

■第2回「七夕吹き流しコンテスト」開催

昨年好評だった「七夕吹き流しコンテスト」は、賞金もアップし、大賞以外にも部門賞、各協賛賞など、40本近くのボリュームになりました。6月12日・13日・19日には、越前市生涯学習センター今立分館にて「吹き流し作り方講習会」が開催され、全国からの220組のコンテスト応募者のうち、県内外から67組の応募者が参加し、吹き流し作りを楽しみました。

審査発表は7月12日(火)、表彰式は8月7日(土)。応募作品は、7月7日～8月15日の期間中、越前和紙の里、及び協賛の県内商店街や観光施設などに飾り付けられます。

●お知らせ

■「ヘソモリ」今秋地元で先行上映

越前和紙工場が舞台の映画「ヘソモリ」は、今秋、越前市いまだに芸術館での先行上映された後、全国上映は来年2月頃となりました。映画の上映を記念し、和紙組合では和紙のヘソモリグッズを企画・制作中です。ご期待下さい。

●「和紙の里」31号ができました。

越前和紙を愛する会が年1回発行している「和紙の里」31号が発行されました。今回は第39回式年大祭関連の特集や越前千年紀、ロマン講座の記事などが掲載されています。



お問い合わせ:
紙の文化博物館(0778-42-0016)

編集後記

京都駅前の百貨店に、ウサギばかりの和物グッズを売っている「びんや」という店がある。ウサギがよほど好きな人が考えたのかと不思議に思っていたら、版元まつ九の徳力さんが提案した店らしい。12人に一人当たればいいし、月は「ツキ」に引っかけ、運を開くという意味もあるそうだ。謎が解けた!(よ)

季刊・和紙だより 第27号(2010年夏号) 発行日:2010年7月1日

発行人:福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:右衛門佐美子事務所 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。